海外調査　ーナイルの賜物ー

前研究第一部　主任研究員　大野二三男

エジプトへ

イタリアを夕方の5時頃に飛び立ち、途中、機内放送に悩まされながら、カイロに着いたのは夜の9時半頃であった。カイロ国際空港に着陸する直前に見た美しい夜景の中に不思議なライト群があり、何かなと、あれこれ想像をめぐらしていたが、後から聞いた話では、遊園地の明かりということであった。こんなに遅い時間に遊園地が開園しているとは信じ難かったが、後で嫌というほど味わった日中の暑さを考えるとうなずけた。

ナイル川

ナイル川は34.5度の緯度差をもつ全長約6,700㎞の大河でウガンダのビクトリア湖からの流れが白ナイルとなり、スーダンのハルツーム付近でエチオピアのタナ湖から流れ出した青ナイルと合流する。そして、さらにスーダンのアトバラでアトバラ川が流れ込んでいる。エジプトに入り、北に向かって流れ、カイロの北でロゼッタ・ドミエッタ等の支流に分かれナイル・デルタ地帯を形成し、地中海へと注ぐ。

古くからのナイル川との関わりを表しているヘロドトスの有名な記述として、「エジプトではナイル川そのものが畑に流れ込んでくる。……川がひとりでに入ってきて、彼らの耕地を灌漑して、また引いてゆく」「エジプトの地域はいわばナイルの賜物というべきもの」がある。その頃は良好な氾濫に恵まれていたのであろうが、現在では人為的な施設がその役割を負っている。

エジプトにおけるナイル川からの取水については、30年前に関係諸国と条約で取水量の取り決めをしている。ただし、使用目的は問わずに、総量が決まっているとのこと。

ナイル川の水は、エジプトにとって極めて重要であり、この水をさらに有効利用しようとダムが建設され、1960年には有名なアスワンハイダムが完成した。

エジプト内におけるナイル川は、カイロとアスワン（L≒960㎞）の標高差が約60m、川幅が50～500m、水深は7～15mである。

①カイロ

カイロは面積が約410㎢、人口が約1,500万人の国際都市で人口密度が高く、道路は慢性渋滞を引き起こしているが、市内は非常に活気があり、想像よりもかなりの都会である。

○カイロ市内のナイル川は、透明度はあまり良くないが、悪臭はない。水面にはホテイアオイが流れており、このホテイアオイから流速は1～2m／sと思われる。また舟運としての役割も大きく、各種の運搬船の航行がみられ、クルーズ船が至る所に係留されている（写真ー1、2）。水上レストランも水位が安定している水辺で開けた水面を眺めながら食事を楽しめるという河畔の立地条件をうまく生かしている（写真ー3）。ただ、日本ではいろいろな制約からこのように水辺に近いレストランは許可にならないであろう。

写真ー1　カイロのナイル川

写真ー2　流下するホテイアオイと運搬船

写真ー3　水上のレストラン

○ピラミッド・スフィンクスはエジプトからは切り離せないものであろう。その謎については、古来より研究の対象とされてきたが、日本の研究者も含め現在でも調査が続けられている。遺跡の風化は思ったより進んでおり、特にスフィンクスについては、傷みが激しくその修復作業が進められているが、難航しているとのことである

（写真－４）。

写真－４　スフィンクスとピラミッド

②ルクソール

ルクソールは、かつてはテーベと呼ばれ、エジプト最大の都市として栄え、カイロから南へ約670kmの位置にあり、さらに、上流にはアスワンハイダムで有名なナセル湖がある。

気温を聞くと、カイロは35度程度であったが、ルクソールでは40度以上にもなった。市内では暑さのため日中の人通りは少なかったが、町の市場は、人で賑わっていた。市場には多くの種類の野菜が積み上げられており、農業国エジプトを身近に感じさせてくれた。

写真－５　ルクソールのナイル川

写真－６　水辺の緑と砂漠

ルクソールでのナイル川は、大河のイメージからすると川幅が狭いように思える（写真－５）。対岸がすぐそばに見え、両岸の緑の向こうに王家の谷を望むことができ、

写真－７　親水公園

砂漠が迫ってきていることが実感できる（写真－６）。河畔の親水公園も良く整備されているが、暑さのためか利用者はいなかった（写真－７）。これは調査日が夏ということで気温が40度以上になり、日向に出て川面を眺めるという気にならないのであろう。ただ、残念ながら夜間については調査ができなかった。

ルクソールといえば、映画「ナイル殺人事件」の舞台となったカルナック神殿、また、ルクソール神殿といった遺跡が豊富にある。カルナック神殿では、かつては、ナイル川から水路がひかれ直接船で来られたという遺構もあり、古くからの関わりを伝えている（写真－８）。

写真－８　カルナック神殿の遺構

おわりに

今回は、過去の歴史の流れから、カイロ、ルクソールの２つの新旧の都市における調査にとどまったが、国内の政情が安定し、ナイルクルーズが楽しめるようになれば、もっと人々の生活と深い関わりを知り、さまざまな表情を体験できると思われる。

ナイル川の両岸の緑地を除くとあとは砂漠が延々と広がっている。これは、カイロにおいても、ルクソールにおいても同様で、緑の向こうに砂漠が続いている。

ナイルの両岸にしか緑はない。日本とは余りにも違う風景であり、ナイル抜きにこの国は考えられない。まさしく、「ナイルの賜物」である。